

「2年次韓国校外学習」への取り組み

—「総合的な学習の時間」試行としての学習活動を振り返る—

平成12年度2年次会

高島智子・小澤信治・奥村準子

福原行也・間瀬昭子・大森俊彦

本校では平成9年から韓国への校外学習を実施し、これと併せてさまざまな事前学習を行ってきた。「総合的な学習の時間」導入にあたり、本校ではこれらの活動を発展させる形の実施を試みている。本文では、過去4回の校外学習とその事前学習を振り返り、生徒を対象とした韓国に関するイメージ調査結果をふまえ、異文化理解とコミュニケーション・プレゼンテーション能力の育成を目的とした総合的な学習活動の在り方を模索する。

キーワード：総合的な学習の時間、異文化理解、国際交流、コミュニケーション、プレゼンテーション

1. はじめに

～「総合的な学習の時間」と校外学習とのかかわりについて～

「総合的な学習の時間」のねらいには、

- (1) 自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること。
- (2) 学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探求活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の在り方生き方を考えることができるようにすること。

とある。

(1) は5つの力の養成の必要性を述べていると考えられる。すなわち、自ら課題を見付ける力・自ら学ぶ力・自ら考える力・主体的に判断する力・よりよく問題を解決する力、である。この5つの力を培い、それを(2)の自己の在り方生き方を考える力、すなわち「生きる力」につながるように指導していく、というねらいが示されていると言える。

私たちは平成9年度から本校で実施されている韓国への校外学習を行うにあたって、これらの「総合的な学習の時間」のねらいに結びつくように意図しながら指導してきた。すなわち校外学習が単なる観光的なもの、あるいは楽しい思い出で終わらせてはいけないと考え、事前指導、事後指導を行う上でも、生徒が主体的に取り組む場を多くするとともに、自らが見付けた課題について、調べ、考え、まとめさせて、事前ならびに事後にその成果を発表させるという方法をとった。さらに事後の発表については、個人研究とグループ研究の2つのテーマについて発表の場を作り、このグループ研究のため、韓国

での日程の中に一日グループ行動（班別自主研修）ができる日を設けることにした。

いま指導を終えて、私たちは、オリエンテーション、課題の設定、調査、考察、まとめ、発表という流れの中に校外学習を位置づけることによって、「総合的な学習の時間」のねらいにそった力を、生徒達の中に育てることが、ある程度達成できたのではないかと考えている。

2. 韓国校外学習の歩み

平成7年度入学生の2年次校外学習をどのように考えるか、夏休み終了後から議論を始めた。総合学科を立ち上げて2年目、原則履修科目『産業社会と人間』（以後『産社』）の終盤にさしかかってきたところであった。さまざまな体験・いろいろな人との交流を通して、自分をあらためて見つめ直し、今後の高校生活や将来の生き方を考える、今までにない面白い科目に仕上がっていたが、1年次後期から2年次にかけて、継続した学習の計画が未定の状態で、どうしたものか思案していた。『産社』で広げた視野をより広くし、生徒個人がいろいろな角度から、多様な切り口での学習、国外にも目を向け、文化の違う人々との交流等により、自らの在り方生き方を考える継続性をつくろうと考えた。当時、アメリカ西海岸・ハワイ・オーストラリア・シンガポール・ニュージーランド・台湾・中国・韓国への修学旅行が私立高校を中心に行われており、実態調査から始まった。

それまでの国内修学旅行と同じ経費積み立てが行われていた（10万円）ので、その範囲内での実施が第一条件となることは言うまでもない。安全や衛生面も気になるところであった。近くで遠い隣国、政治問題もあり、どのような交流になるか不安はあったが、韓国への校外学

習を試みた。

しかし、ここで大問題が生じた。引率教員の海外渡航旅費が、高等学校では認められていないということが、学校教育部に計画を提出してから判明したのである。そこで、国立の附属高等学校で、奈良女子大と愛知教育大で海外修学旅行が行われており、どのような方法で認められるのかを教えてもらい、急速後援会の協力を願った。今では当たり前になってしまっているが、この時初めて【委任経理金】という存在を知ったのである。これが以後、国外への校外学習だけでなく学校運営には欠かせないものとなったのは周知の通りである。以下、今回（第4回）に至るまでの第1回から第3回の校外学習に関わる指導経緯を紹介する。

(1) 第1回（平成9年3月12日～15日）

『産社』の流れを意識し、夏休み終了までの期間を個人の事前研究とし、地歴・公民、被服・食物等の科目では韓国を意識した内容を盛り込んだ授業を行い、黎明祭で展示発表を行う。旅行前に生活に密着した事項の学習。旅行では、朝鮮半島問題の体感、同じ年代の高校生との交流、総合学科それぞれの類に該当するコース別見学及び体験学習を中心に行うこととした。

①韓国語学習について

韓国高校生との交流に「あいさつ」や「感謝」の表現くらい韓国語でしたいという発想から、担任団の伝手を頼りに講師を探し、筑波大学大学院生と上武大学学生の韓国人留学生が引き受けてくれることになり6名の方に3回の学習をお願いした。

1回目はハングルの学習で文字の構成や発音を学習し、日本語と違う発音のあることを学び、2回目に日常生活で使われることば（あいさつ、別れの時、お詫び、お願い、買い物等）をカタカナをふった文字を見ながら反復練習し、3回目に韓国ではやっている音楽を聞いたり、ソウルの様子を聞いたりしながら、交流会に使う名札の下書きを見てもらった。毎回終了時に生徒の感想ややってほしいことなどを用紙に書き、各講師に読んでもらって次回の参考にしてもらった。9人の引率者のなかの8人が韓国は初めてだったので、60分の学習の後の話し合いでかなり大きな予備知識が得られ、生徒のために行ったことであったが教師側にも大きな学習となり、大変有意義であった。講演を含め3回が適当であったという意見が多かった。また、どのような内容をどの程度事前に学習すればよいのかを確認できたことは収穫であった。

②授業における事前学習

ア 歴史

2年次は世界史Aが必修であるためその授業を利用して「民族主義とアジア諸国」の単元の中で韓国についての学習を行った。時期は平成8年度の前期6月ごろと後期12月～1月の2度に分けて行った。

指導概要は、古代から現代までの朝鮮半島の歴史の基礎的事項を日本や中国のアジアの各地域に関連して学習した。近・現代を重視し、できる限り内容を精選し基本的事項を学習した。

イ 公民

2年次は現代社会が必修のため、授業を通して、日本と朝鮮との文化の交流を、過去にさかのぼって見た上で、現代の日本の社会に取り入れられている朝鮮の文化を身近な日常生活に目を向けて理解し、異文化に対する関心や態度を養うことを目標に取り組んだ。

ウ 家庭一般

韓国でよく食されるビビンバを献立にした調理実習を4クラス行った。実習後の感想文によると、「おいしかった」、「辛かった」また、「韓国の人はこんな食事をしているのか」といった感想がみられた。また、班ごとの実習なので、班により見栄えや味の差があり、またクラスによっても評価が異なったようであった。韓国の食事を通して、韓国の文化を理解しようというねらいがどれくらい達成できたかはかることができなかったが、近い隣国であっても食事には大きい違いがあるということは解ってもらえたように思う。また、事前学習で韓国の料理や食品について調査発表したグループもかなりあり、それらの生徒たちにとっては自分たちの調べた食事を実際に作るということでかなり興味をそらされたようであった。

エ アパレル技術I

在日韓国人の方2人に社会人講師として、授業をしていただいた。2時間という短時間なので、授業計画Ⅰ、Ⅱ、Ⅲについては、着付けを行いながら、説明をしていただいた。受講者全員が好きな韓国服を着て、生きた文化に触れることができた。また、授業を通して韓国の方と親しくお話が出来たことは、単に勉強だけでなく、親しみを持って韓国に出発することができ、大変有意義であった。授業の感想も「チョゴリを着ることが出来て嬉しかった」「韓国の色々な話も聞けて、とても勉強になった」という生徒が多かった。

③テーマ別事前学習

2年次になり韓国への校外学習が本格的になるに従い、

各個人での事前学習を行うこととなり、その発表の場として2年次だけの発表会と黎明祭を利用した。各生徒は自分でテーマをきめて夏休みの時期を利用し、図書館やテーマに関する情報のある機関へ直接伺って資料を集め、レポート用紙等にまとめた。それをさらに発表するために模造紙に書き移すなどして、まず2年次の発表会を行い、さらに最終的に年次の出展として黎明祭で発表展示した。

《事前学習日程》

- 6月 3日(月) テーマのジャンル別指導
- 17日(月) 個人の計画書作成
- 21日(土) 個人の計画書締め切り
- 25日(火) 計画書不備の生徒指導
- 28日(金) 計画書不備の生徒再提出日
- 7月～8月 個人の計画に従って学習を進める。
- 8月上旬にファックスで学校に中間報告を提出
- 10月11日(金) 事前学習完成版提出期限
- 18日(金) 事前学習研究発表
- 19日(土) 黎明祭に向けて事前学習班別打ち合わせ
- 21日(月) 黎明祭に向けて発表作業
- 11月 1日(金) 黎明祭展示準備
- 2日(土) 黎明祭展示作業

初めてのことであり予測のつかないことも多く、生徒の自主的活動を念頭に置いていたが、時間的な問題と教師自身の不安定(旅行業者も不慣れ)なこともあり、生徒に十分な活動を保証できなかった面が反省点である。

(2) 第2回(平成11年3月9日～12日)

4期生の校外学習を実施するに当たり、校外学習委員を通して、生徒達にアンケートを実施したところ、外国を希望する者が多かった。教師側から、条件(費用・学習のねらいを考えること)を示した結果、2期生と同じく韓国が最終的に決定された。

事務関係で様々な書類提出があったが、2期生での経験が大いに役立った。

校外学習に関して産社での体験学習をさらに拡大し、視野を広げ、もって自己発見の機会を広げるなど、基本的には、2期生と同様のねらいであり、その経過もほとんど変わらない。国際交流、異文化理解、平和学習、高校生活の充実等を目的とした。個人研究も行い、文化祭時に壁新聞様式で発表し、保護者初め外来の人たちから、好評の感想も書いていただくことが出来た。

4期生としていくつか試みた点を以下に述べる。

①校外学習の実施前と実施後の「生徒の韓国に関する理解度の差」を調査した。

韓国に関する事前学習を1年次の1月(平成10年1月)より開始するに当たり、韓国への興味関心を喚起するねらいもあり、「韓国に関する50の質問」を冬休みの宿題とした。この正答率と翌年校外学習実施後の正答率を比較した。全ての内容に渡り大差の向上率が認められた。机上の学習ではなく、実際に体験することの有効性を実感することができた。

②韓国への興味関心を高め、また2年次での個人研究のテーマを得るきっかけにもなるようにとの目的で、1月から事前学習を開始した。1年次担任団8名による韓国に関する授業を行った。韓国の政治・経済、韓国の文学、初級ハングル・英会話講座、韓国のスポーツ、韓国の食、生活文化等教師の専門分野に内容を求めた。

③語学学習講師を在日韓国人の方4名にお願いし、社会人講師として、各クラスに1名配して、韓国人の生活などの話を交えながら、年4回実施した。

④筑波大学長洲教授のもとで理科教育学を学ぶ大学院の留学生、崔允鏡さんに、6月と2月の2回に分けて講義をお願いした。1回目は韓国の全般について、2回目は校外学習の直前の時期ということから、ソウルの現状や情報などを中心とした内容をお願いした。初回は韓国の民俗衣裳チマチョゴリを身につけて講義して下さり、大いに生徒の興味関心を高めた。

⑤韓国高校生との交流会について、2期生では初回であり、いろいろな理由から、こちら側からの働きかけが出来なかった。そこを何とかしたいということで、出来る範囲を考えて、全員での合唱(花)と有志による笛の演奏を行った。叱咤激励しつつ練習を何度も行い、当日はうまくいったよかったなあ、というのが本音である。

⑥交流校へのプレゼントを松田教育作成の龍笛にしたこと。錦の袋に入れ、桐箱に納めて、当日持参した。また、生徒会長に本校の生徒会長から、千羽鶴を贈った。

⑦校外学習地として板門店を加えたこと。

厳しい国際情勢や平和を考えるという目的のため、板門店見学を取り入れた。保護者会を開き、その目的や安全性など説明し(旅行業者も参加)、了承を取り付けた。

しかし残念ながら結果的に板門店見学は出来なかった。北へ牛を贈った韓国「現在」会社の会長が帰国することになったことが前日にわかり、板門店が閉鎖されたためである。

⑧韓国の民俗芸能や伝統食を理解するために、コリアハウスでの会食と観劇を取り入れた。現地のガイドに高校生が賛沢ですね、と言われた体験であったが、日本であ

まり触れる機会のない韓国の芸能と韓定食を体験し、意義があった。



写真：コリアハウスでの韓定食

折から新学習指導要領が告示され、「総合的な学習の時間」について様々に取り沙汰されていた。校外学習を終えて、10月の全附連「総合的な学習の時間」分科会において年次会の取り組みとしての「2年次校外学習及び事前学習」が「総合的な学習の時間」のねらいに合う内容を含むものである、という発表を行った。

また、11月に、本校の総合学科研究大会において1年次の「産社」・コミュニケーション・キャンプ初め様々な体験学習、LHR・学際時間利用の「2年次校外学習」、3年次「課題研究」が「総合的な学習の時間」を構成する内容を示唆するものとして、分科会で各分野の担当者がまとめて発表した。

(3) 第3回（平成12年3月7日～10日）

第1回、第2回の流れを継続させる計画を立てた。事前準備・発表等全校的取り組みとして定着しつつあったため、前回と同程度の成果があった。ここでは、第1回～第2回では行わなかった事柄と、特に記録すべき事柄のみ報告する。

①偶々PTA会長の知人が韓国のキリスト教会の布教活動のため来日する機会を捉え、宗教色を一切出さない形で、茶道具や衣装、歌などの実生活の具体例を紹介してもらった。友好的で親しみやすく、好評であった。

②韓国高校生との交流会では、相手校（美林女子電算高校）から、次の二点で高く評価された。

a. 生徒会長の挨拶

韓国の著名な映画俳優が来日し参加した韓国映画の試写会の話題を盛り込み、ユーモアを交えた挨拶で、観光会社のガイドや相手校の先生方に、完璧な発音だと評価された。事前指導でハングル講座を担当された在日韓国人の方に特

別指導して頂いた成果であった。

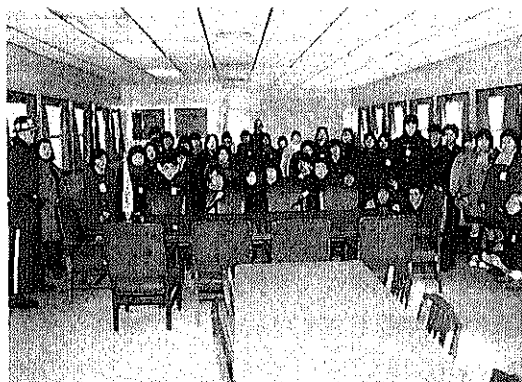
b. 生徒のオリジナルダンス

1年次の校外学習で好評だったダンスをアレンジしたダンスで、相手校の生徒や先生方から拍手喝采を浴びた。

③「板門店」見学については、直前まで二国間が緊張状態のため、見学は中止とされていたが、運良く実施できたことが、今回の大きな学習となった。

敢えて韓国を選ぶ理由の一つとして、38度線で分断され、今も停戦状態の「厳しい現実」に対峙して、平和を考え、日本のあり方を考えることを上げてきた。しかし、見学に伴う誓約書は緊急の場合の責任を軍や国に求めないというもので、保護者に事前の了解を求める会合を開いた。「安全」の確保を第一に考え、些細なことでも問題が生じたら中止する旨を伝えながら、敢えて板門店を訪れようとしている理由を生徒や保護者と一緒に考える機会になった。

統一展望台とは違った臨場感が大きな衝撃を与え、今現在進行中の国際問題・平和問題を肌で感じる機会を得たことは、大きな成果であった。



写真：板門店・軍事停戦委員会会議場での記念撮影

3. 平成12年度（第4回）韓国校外学習の概要 〔今年度方針〕

今回で4回目を迎える韓国への校外学習は、年々充実してきた事前学習をさらに発展させ、新学習指導要領の「総合的な学習の時間」が目指す「問題解決能力」や「探究活動に対して主体的・創造的に取り組む態度」、すなわち「生きる力」の育成を目指すこととした。そのため、年次会において具体的な年間活動計画を検討し、以下の活動考えた。

①筑波大学韓国人留学生との交流会

本校の佐藤校長から、筑波大学心身障害学系の鄭仁豪（チョン・インホ）先生を紹介していただき、鄭先生の

コーディネートにより筑波大学の韓国人留学生と交流会を定期的に持つことを計画できたので、交流会においてハンゲル学習・韓国文化に関する学習を行いながら、異文化理解をはかる。

②「韓国に関する個人研究」と発表会

3年次必修科目「課題研究」の準備段階として、また2年次で年間を通じた主体的探求活動として「韓国に関する個人研究」をおこなう。まず「春休みの課題」において自分のこれまで持っている韓国に対するイメージを具体化させ、興味関心を喚起させる。次に、韓国に関するテーマを各自が自由に設定し、夏季の長期休業を利用してレポート作成、発表などの学習活動を行い、情報収集能力・プレゼンテーション能力の育成をはかる。

③主体的な委員会活動

生徒が校外学習に対して主体的に活動できる場をできるだけ多く設けることを意図し、今年度の校外学習方針に合致した役割を担う「校外学習委員」を各クラスから7名選出した。その役割は以下の通りである。（各係の具体的活動については次節に述べる。）

○総務・2名

校外学習に関わるクラス全体の仕事を担当

○交流・2名

美林女子電算高校との交流会の企画・準備を担当

○研修・3名

韓国人留学生との交流会の企画・運営と、校外学習での班別自主研修の計画・まとめを担当

○編集・2名

校外学習のしおりと記念文集作成を担当

④班別自主研修に向けた事前学習

今年度校外学習で新たに実施する活動の一つが「班別自主研修」である。班別自由行動の時間を1日設け、培花女子大学の学生によるガイドと各班に渡された携帯電話を頼りに、各班の目的に即した時間を過ごすことで、ナマの異文化にふれる機会を作ろうと意図した。そのた

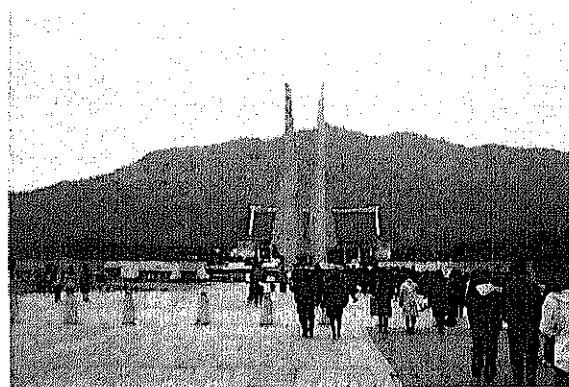


写真：班別自主研修で学生ガイドと打ち合せ

め早くから活動班を決め、個人研究などを通じて韓国に対する理解を深め、自分の知りたいこと・見てみたい場所・学んでみたい事柄などを班で話合わせることをはかる。

⑤「独立記念館」の見学

今年度校外学習のもう一つの柱が、独立記念館の見学である。独立記念館は、1980年代の日韓教科書問題・従軍慰安婦への戦後補償問題などがきっかけとなり、韓国の自主独立と国家発展・民族精神涵養などを目的に設立された施設である。そのためこれまで日本人観光客があまり訪れたことのない場所であったが、21世紀を担う若い世代が日韓の過去の不幸な歴史を知り、新しい日韓関係を築いていくためには是非見学させたいと考え、校外学習に盛り込んだ。



写真：独立記念館前のモニュメント

〔年間計画〕

以上の5つの方針をふまえ、以下の通り事前学習の活動を計画した。校外学習の事前学習は、主に土曜日の学校裁量時間とLHR、定期考査終了後で長期休業前の登校日などを利用した。

1年次 事前学習活動計画（1月～3月）			
1	31	土	2年次校外学習ガイダンス （事前学習と校外学習の概要説明、校外学習用ファイル配布、「韓国に関する50の質問」実施）
2	7	月	LHRを利用した2年次担任団による 出前授業（2月28日まで計4回）
3	24	金	終業式・「春休みの課題」説明・配布

※次頁の表：ゴシック体の部分が校外学習関係の行事である。

2年次 LHR・学校裁量時間計画(4月～3月)			
4	10月	始業式(「春休みの課題」提出)	
	15土	コミュニケーション・キャンプⅡ	
	17月	教育実習生着任式・写真撮影	
	24月	ポ・キャンIIアゲート 調査・大縄飛び練習	
5	1月	SG式進路適正検査	
	6土	生徒総会	
	8月	漢字検定模試	
	15月	体育祭を振り返る	
	20土	留学生との交流会準備(班編制)	
	22月	〃(自己紹介カード作成)	
	29月	〃(班別研究テーマ設定)	
6	3土	留学生との交流会①	
	5月	漢字検定模試	
	12月	中間考査	
	17土	漢字検定	
	19月	黎明祭HR企画について話し合い①	
	26月	留学生との交流会準備	
7	1土	留学生との交流会②	
	3月	夏休みの研究計画	
	10月	事前学習(パスポート取得説明)	
	15土	実力テスト(業者模試)	
	17月	自宅学習(三者面談)	
9	2土	個人研究報告会準備(班別)	
	4月	教育実習生着任式	
	11月	個人研究報告会(クラス別)	
	16土	実習生離任式・留学生との交流会③	
	18月	黎明祭HR企画計画	
	25月	HR別活動	
	30土	終業式・学校説明会準備	
10	2月	代休	
	7土	黎明祭(個人研究)発表準備①	
	9月	体育の日	
	16月	通知票渡し	
	21土	黎明祭HR企画準備①	
	23月	黎明祭(個人研究)発表準備②	
	30月	黎明祭HR企画準備②	
11	4土	黎明祭片づけ	
	6月	代休	
	13月	進路説明会(合同LHR)	
	18土	生徒会役員選挙	
	20月	校外学習班別研修計画①	
	27月	クレバリン検査(合同LHR)	
12	2土	生徒総会	
	4月	校外学習交流会計画	
	11月	校外学習しおり準備①	
	16土	校外学習事前学習(英会話講座)	
	18月	自宅学習	
1	15月	校外学習班別研修計画②	
	20土	漢字検定	
	22月	校外学習交流会準備①	
	29月	校外学習事前学習(ハンゲル講座)	
2	5月	校外学習しおり準備②	
	17土	校外学習交流会準備②(保護者会)	
	19月	後期期末考査	
	23金	校外学習直前指導①(両替・保険加入)	
	26月	自宅学習	
3	1木	校外学習直前指導②(交流会準備)	
	3土	自宅学習	
	5月	校外学習直前指導③(しおり説明)	
	6火	〃④(挨拶・マナー確認)	
	7水	〃⑤(交流会準備)	
	12月	荷物事前発送、最終確認	

(校外学習概要)

日 程：平成13年3月13日(火)～17日(土)

宿泊先：ソウル教育文化会館(ソウル特別市瑞草区)

参加者：生徒154名(男子55名・女子99名)

教員9名(副校長・2年次担任団)

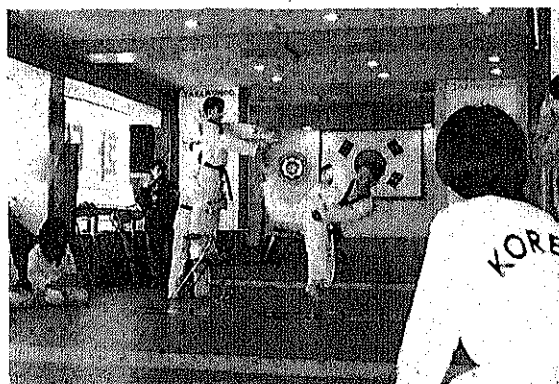
添乗員5名・看護婦1名 計169名

業 者：日本旅行 埼玉教育旅行支店

ロッテ観光(現地エージェント)

旅 程

13日 (火)	6:30	京成上野駅 集合	
	8:00	成田空港 着	
	12:30	金浦空港 着	
	14:30	自由の橋 見学	
	15:30	統一展望台 見学	
	18:00	夕食	
	20:00	宿舎 着	
14日 (水)	8:30	宿舎 出発	
	9:30	韓国民族村 見学	昼食
	13:00	独立記念館 見学	民芸品店
	18:30	夕食	
	20:00	宿舎 着	
15日 (木)	8:30	宿舎 出発	
	9:30	景福宮・国立民俗博物館 見学	
	11:00	免税店 昼食	
	14:30	美林電算女子高校との交流会	
	18:00	夕食	
	20:00	宿舎 着	
16日 (金)	8:30	宿舎 出発	
	9:30	培花女子大学生との班別自主研修	
	18:00	夕食	
	20:00	宿舎 着	
17日 (土)	9:00	宿舎 出発	
	9:30	南山公園 見学	食品店
	13:30	金浦空港 出発	
	16:30	成田空港 解散	



写真：班別自主研修でのテコンドー体験

4. 各系の活動

○総務

総務は、各クラスのHR委員長・副委員長が担当した。クラスをまとめ、代表する立場である。2年次の夏休みに入る前に総務委員会を開き、総務委員長・副委員長を選出するとともに、夏休み中に生徒全員が各自取得することになっているパスポートの取り方を、クラスで説明することになった。以前は、旅行業者の説明で申請書を書いて取得していたものであるが、生徒個々人の課題として取り組ませたわけである。また現地でのバスや空港へ向かう車内の座席表もクラスの仲間の意見をまとめて作成した。総務としての一番の仕事は海外での行動の際に、クラス全員の動向をつかむことであり、特に集合離散の時に全員がいるかどうかの確認を短時間に行うことであった。班単位で生徒は整列することになっており、班長が班員の確認、班長は総務委員へ報告、総務委員は担任に報告という流れを作った。出発前に体育館で、集合、整列、点呼、報告の練習を何度か行ったが数回のうちに短時間でできるようになった。韓国でもこの体制がスムーズに機能し、総務委員は日本にいたときよりも緊張感もあったせいか、立派にその責務を果たしていた。

○交流

第一回目から引き継がれている『美林電算女子高校』との交流会の出し物の決定及び準備活動のリーダーシップが主な役割となる。

1) 全員での歌：「翼を下さい」（2部合唱）

：「大地讃頌」（混成4部合唱）

①楽譜探し、印刷、配布

②HRに各パートと全体のテープを配布しパート練習、合唱練習

③全体練習は様々な手法を駆使してやる気を起こさせていた。指揮者・伴奏者をつけて生徒リーダーは厳しい指導を重ねた。

2) 舞台での出し物

①物語を作り数人で演じる事が決まった。登場人物まで話がまとまったところで、言葉の問題をどうするのかはたと止まり、計画は白紙に戻った。

②かるた部実演

年次の部員3名に袴姿で、韓国語による競技かるたの説明と模範試合をした。

3) 現地でのリーダーシップ

実際に行ってきたことを文章にすると僅かなことであるが、担当教員の支援を受けつつ、全体をまとめるのに

はじめは遠慮がちだった彼等が、「これではいけない、不十分である」という気持ちが盛り上がり、リーダーとしての意識の高まりは見ていて確認できるほどに成長していった。

○研修

研修係の主な仕事は、

①韓国人留学生との交流会の企画・運営

②「韓国に関する個人研究」発表会の企画・運営

③校外学習での班別自主研修の計画

の3本立てである。仕事量が多いため、他の係よりも1名定員を増やして12名でスタートした。交流会や発表会が近づくと、放課後2BHRに集中的に集まり、どのような会にするか、どんな準備が必要か、誰がどんな役割を分担するか、などを話し合い、行事の直前は毎日残ってリハーサルや準備に追われた。2年次・3年次を通じて、各3回の交流会・発表会（クラス内の発表会は除く）をおこなった研修係の活躍は非常に大きなものがあつた。その活動の詳細については、次節に述べたい。

○編集

他の係に比べスタートは後半に入ってからで、仕事の内容は、しおりの作成である。

今回のしおりのコンセプトは「学習に使うもの」である。訪問先の説明に続きメモだけでなく、個人研究や班別研修とのからみを考慮した学習活動の記録欄を大きく取り、終了後のまとめに活用できるものとした。集中作業であるので、各HR2名の委員は得意な仕事を主体に担当教員との合同作業で作り上げていった。終了後の仕事は、個人がまとめた研究のまとめ作成となる。個人研究のフロッピーディスクを集めての編集作業と冊子づくりなので、3年次の現在まで継続している。

5. プレゼンテーション・コミュニケーション能力の育成

～さまざまな交流会・発表会を経験して～

第1節でも述べたとおり、平成12年度の校外学習の実施方針の根幹は、問題解決能力や主体的創造的な問題探求の態度、すなわち「生きる力」の育成にある。この「生きる力」育成のために必要な具体的能力として、プレゼンテーション・コミュニケーション能力の二点を考えている。

本校は職業教育を主体とした総合学科高校であるが、

学年が上がるに連れてホームルームを基盤としない選択授業の割合が増え、選択授業において未知の人間との実習・作業などをこなしていかなければならない。その際、自分の意志を他者に伝え、相手の考えを受け入れた上で共同の作業をおこなうことができる能力を育てることは、総合学科における「生きる力」の育成として非常に重要である。

また、国際化・高度情報化が進む今日の日本社会において、適切な手段による自己表現と柔軟で寛容な心をもった他者理解は、社会生活を送る上でこれまで以上に必要不可欠な能力となりつつある。

さらに、大学進学率が上昇しつつある本校において、進学者の多くが推薦入試・AO入試を始めとする特別入試を合格して進学するという現状をふまえ、校外学習の事前学習において探求・研究活動の姿勢を養い、その成果を他者に説明することができる自己アピールの方法を身に付けることは、進学のチャンスを増やす重要な要素である。

以上の理由により、今年度の校外学習事前学習では、個人研究と交流会、発表会を重視した活動を行ってきた。

〔韓国人留学生との交流会〕

(1) 第1回(平成12年6月3日、学校裁量時間に実施)

5月15日に研修係が初めて会合を持ち、研修係の中での大まかな担当(交流会・発表会・班別自主研修)を決め、まず、①各クラスの自主研修班決め(各クラス8班)、②パーソナルカード(自己紹介カード)の作成、③名札の作成、を指示した。その後、2回の会合を持ち、第1回交流会でどのようなことを行いたいクラスで話し合い、その意見を持ち寄って研修係が検討した結果、「グラウンドで留学生とドッジボール」と「筑坂の系列(専門教科)紹介」ということに決定した。



写真：第1回交流会での系列紹介(1類・農業)

《当日の流れ》

8:55～ 9:30	交流会準備
9:30～ 9:45	交流会開会式(体育館)
9:45～10:45	筑坂系列紹介(クラス別各15分程度)
11:00～12:00	レクリエーション(ドッジボール)
12:00～12:30	留学生と生徒の懇親会(各班20人)
12:30～13:30	研修係と留学生の懇親会(桐蔭会館)
13:30～14:30	2年次担任団と留学生との昼食会

事前に留学生の手元に送ったパーソナルカードは、留学生8名の担当クラスごとに目を通してもらい、個人研究について簡単なコメントを記入していただいた。当日のスケジュールは交流系の自主性にまかせたため、時間がおおしまい、全体的にかなり忙しい内容になってしまった。しかし、系列紹介ではⅡ類の生徒が旋盤実習を披露したり、Ⅲ類の生徒がみそ汁を作ってみせたり、いかにも「生徒の手作り」という内容で留学生にも感心された。また、本校が「職業教育ベースの総合学科」であることも理解してもらったようだ。何より、交流係が一人から自分たちで計画を立て、クラスへ連絡し、当日の行事を運営した努力は大きかった。ただ、クラス別の懇親会は、特にテーマも設けずに時間を設定したため、「質疑応答」的な内容となり、準備不足であった。

(2) 第2回(平成12年7月1日、学校裁量時間に実施)

研修係が前回の反省をふまえ、今回はタイムスケジュールを考えながら、無理のない内容と時間で行うことを意識した。今回の交流会では留学生の方からハンゲルを教えてもらうことがメインとなった。

《当日の流れ》

9:30～10:30	ハンゲル講座(各クラス20人ずつ2班)
10:30～11:30	懇談会(個人研究について)
11:30～12:00	研修係と留学生の懇親会(桐蔭会館)
12:00～13:00	2年次担任団と留学生の昼食会

事前に留学生からハンゲル基本音節表が送られてきたので、予習を兼ねて生徒は自分の名前をハンゲルで書き、名札に記入して交流会に臨んだ。当日は20人のクラスでハンゲルについて、その歴史や音と文字の成り立ちについて留学生のみなさんから教えてもらったが、クラスによって講師である留学生の教え方がさまざまで、生徒の盛り上がりにも若干の差があったようだ。

(3) 第3回(平成12年9月16日、学校裁量時間に多目的室にて実施)

第3回は来校できる留学生の方が少ないということもあり、多目的教室での全体学習となった。今回の柱は、

①「韓国に関する個人研究」中間発表会（次項において説明）、②ハングル学習、の2本立てである。①は、「夏休みの課題」について各クラスの代表者9名が発表するというものだったので、事前にクラス内での発表会をおこなって投票により代表者を決定した。なお、「夏休みの課題」は以下の内容である。

- ・韓国（国際交流）に関する書籍を1冊読む。
- ・書籍の内容について、A4用紙1枚で要約する。
- ・書籍を読んだ感想をA4用紙1枚に書く。
- ・クラス内発表用のレジュメを所定の用紙に書く。

この課題を出す際に意図したことは、3年次必修科目「課題研究」の準備段階として、研究活動の準備運動となる学習を行わせるということである。ただ単に「感想文を書く」という作業ではなく、「要約」と「感想」の違いを意識させること、見出し（目次）を作ることによってレポートを見やすく工夫すること、参考文献の表示方法を知ること、レジュメを作って発表の準備をしてから発表に臨むこと、などを意識させることで、「課題研究」における指導の手間を省き、3年次の「課題研究」では、より内容が深化した指導を行えるように意図したのである。

ハングル学習については、4クラスの一斉授業は非常にやりづらいだろうと予想したが、4名の留学生のみなさんの工夫と情熱により、思った以上に盛り上がった内容だった。文法にこだわらず、旅行で頻繁に用いられる簡単な日常会話の発音を重視した学習だったことが、生徒にも理解しやすかったようである。

以上、平成12年度には計3回の交流会をおこなってきた。全体を通した反省として、初めての試みであったとはいえ、生徒への動機付けや目的意識の涵養をはかることが不十分だったことは否めない。せっかく前年度末から担任団が各クラスで出前授業をおこなったり春休みの課題をおこなったりしてきたのだが、そのことと留学生との交流会とが直接のつながりを持たずに始まってしまったことが悔やまれる。また、留学生の送迎について、当初の予定では大学のバスを利用させてもらうはずだったが、土曜日の利用はできないことが直前になって分かり、結局本校教員が庁用車を運転して筑波大学まで往復することになってしまった。これが交流会前の準備と重なり、過剰な負担となってしまったことも課題である。

しかし、筑波大学の留学生のみなさんは、全くのボランティアにも関わらず土曜日を丸一日使って坂戸まで往復して下さった。このことに非常に感謝する次第である。

特に代表者の超源逸（チョウ・ウォンイル）さんとは、メールによる打ち合わせを何度もおこない、大学院の修士論文執筆に多忙の中、色々とお骨折りいただいた。超さんからの意見にもあったが、やはりボランティアとしての活動には時間的にも内容的にも限界がある。さらに、来年度からはこれまでのような土曜日の学校裁量時間がなくなり、「総合的な学習の時間」はウィークデーに行われるため、このような形の協力を要請することは非常に難しくなる。予算面がクリアできれば、社会人講師あるいは非常勤講師という形態でお願いする方が、交流会の内容もより充実するのではないだろうか。今後の課題である。

〔発表会〕

(1) 学年発表会（平成12年9月16日、多目的室）

前項に述べたとおり、第3回の交流会において、「夏休みの課題」である「韓国に関する個人研究」の中間成果を発表する場として、留学生のみなさんにも聞いていただいた。最初の発表会で、準備の時間も少なかったこともあり、発表者は印刷綴じ込みされ生徒に配布された文集原稿を読んで聞かせるだけの発表であった。

《プログラム》

- | | |
|-------------------|-----------|
| 1 開会のあいさつ | |
| 2 「かんたんなことから」 | 2-D 佐野 周 |
| 3 「韓国の公害について」 | 2-B 戸田 玲子 |
| 4 「これからの日韓関係」 | 2-D 宮澤由佳里 |
| 5 「韓国のファッション」 | 2-C 栗原 涼子 |
| 6 「朝鮮芸能者広大（クァンテ）」 | 2-A 草野むつみ |
| 7 「キムチについて」 | 2-C 影山 友美 |
| 8 「在日コリアン」 | 2-B 立石 麻実 |
| 9 「日本と韓国の過去」 | 2-B 原田 沢 |
| 10 留学生のみなさんからの講評 | |

(2) 黎明祭発表会（平成12年11月3日、B館1階ホール）

学年発表会での成果と反省をふまえ、文化祭の場で2年次生以外の本校生徒と来客に広く聞いてもらうことを目的として、来客受付近くのB館1階の生徒ホールに特設会場を作成した。また、今回はプロジェクターとスクリーン、ヴィジュアルプレゼンター（実物投影機）を用意して、映像を利用した発表を試みた。そのため、発表者の何人かはコンピュータ利用技術の優れた仲間に応援を求めたり自分で取り組むなどして、プレゼンテーションソフト「パワーポイント」によるスライドを作成した。また、コンピュータを利用しない生徒は写真やイラストを用意して実物投影機を利用した。一方、研修係は企画代表者として黎明祭実行委員・生徒会文化部との連絡調

整をおこなったり、会場設営・機材借り出し、発表資料（文集）の編集、発表会司会などを務めた。

当日、晴天に恵まれた会場は、天窗からの光がスクリーンの写り具合に影響するなど環境面での苦労があったが、受付近くの会場は通りかかりのお客が足を止めて発表を見守るなど、注目を浴びた。発表者も多くの一般のお客の前での発表は、緊張を強いられる一方、無事成功したことで自信につながり、またパワーポイントを利用した発表のノウハウも身に付けることができたようである。

《プログラム》

- | | |
|----------------------|----------|
| 1 開会の挨拶 | C組 新井 隆弘 |
| 2 これまでの学習経過と校外学習での予定 | A組 高橋 智子 |
| 3 発表 | |
| ①これからの日韓関係 | D組 宮澤由佳里 |
| ②在日コリアンに対する差別について | B組 立石 麻実 |
| ③韓国の生活環境について | B組 高田 純雄 |
| ④反日感情 ― 韓国・朝鮮人と日本人 ― | D組 山田 晃子 |
| ⑤韓国のファッション | C組 栗原 涼子 |
| ⑥キムチについて | C組 影山 友美 |
| ⑦韓国の公害問題について | B組 戸田 玲子 |
| ⑧これまでの韓国・反日を捨てる韓国 | A組 小松 結 |
| ⑨朝鮮芸能者 “広大（クァンデ）” | A組 草野むつみ |
| ⑩かんたんなことから | D組 佐野 周 |
| 4 講評 | 佐藤 常雄 校長 |
| 5 閉会の挨拶 | D組 久保田 稔 |

(3) 研究発表会（平成13年4月21日、体育館）

3月に4泊5日にわたる校外学習を経験し、年間を通じて研究・発表・交流などの活動をおこなってきた校外学習事前学習の総まとめとして、体育館で留学生と2年次生全員を招いて研究発表会をおこなった。今回の発表の概要は、

- ①校外学習委員の各係代表の活動報告
- ②班別自主研修の報告
- ③「韓国に関する個人研究」代表発表
- ④校外学習の様子を記録したビデオの上映
- ⑤個人研究レポート・班の報告（模造紙）・校外学習しおりの展示

などである。

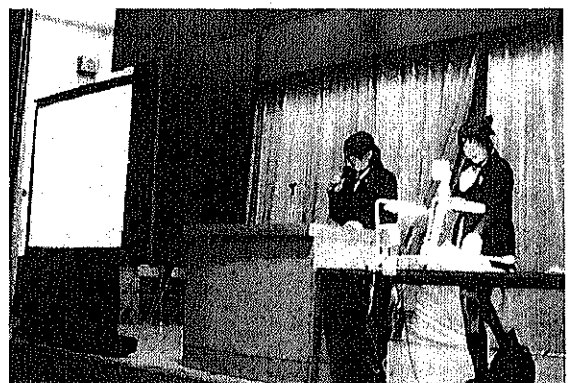
①は、各係代表へ発表の意図を伝えることがうまくできず、口頭で述べるのみの印象の薄い発表になってしまった。②は、各クラス1班の発表だったが、実物投影機に韓国の写真をたくさん写して説明する班や、テコンドーを実演する班、録音テープやコント風の小芝居を見せる班などバラエティに富む内容だった。また、③もパワーポイントを利用したプレゼンテーションが定着し、発表者の堂々とした態度が印象的だった。また④は、2月末に行われた予餞会でビデオ編集を行って自信をつけ

た生徒が、教員の撮影したデジタルビデオテープと生徒から集めた写真を編集して10分程度のビデオに編集し、上映しながら説明をおこなった。⑤は、発表会の休憩時間に体育館内にパネルを用意して模造紙を貼り、レポートやしおりなどは会議用机を用意して展示した。

新年度早々の日程だったため、準備の時間も少なく発表者と研修係は非常にきつい仕事となってしまった。しかし、体育館という本校では大きなステージで発表会を企画するという経験は、生徒にとって大きな自信につながったと思われる。

《プログラム》

- | | |
|----------------------|-------------------|
| 1 開会の挨拶 | 3-B 高澤ちえ美 |
| 2 団長（副校長先生）のことは | |
| 3 各係の報告（研修・総務・交流・編集） | |
| 4 班別自主研修の報告 | |
| 「韓国の食」 | A組1班 |
| 「テコンドー」 | B組2・8班 |
| 「昌慶宮」 | C組4班 |
| 「韓国でのお買い物」 | D組5班 |
| 5 休憩（展示物見学） | |
| 6 個人研究の発表（第1部） | |
| 「韓国（美）クッキング」 | 3-A 富澤 真美 |
| 「韓国の経済」 | 3-A 張間 智子 |
| 「韓国のマナー」 | 3-B 石母田可奈子 |
| 7 ビデオ上映 | （編集と説明：3-B 前原江津子） |
| 8 個人研究の発表（第2部） | |
| 「韓国のお菓子」 | 3-C 谷口 佳子 |
| 「韓国の映画史」 | 3-C 松木 孝夫 |
| 「これからの日韓関係」 | 3-D 宮澤由佳里 |
| 9 留学生のことは | |
| 10 校長先生の講評 | |
| 11 閉会の挨拶 | 3-C 栗原 涼子 |



写真：研究発表会・実物投影機を使った発表の様子

〔活動の成果と今後の課題〕

前述したとおり、発表会を通したさまざまな活動は、プレゼンテーション・コミュニケーション能力の育成を意図して企画したものである。プレゼンテーション能力については、発表者は特にそのスキルアップが課題研究やAO入試を始めとした特別入試の場面でも活かされているようである。また、発表者に限らず、「韓国に関す

る個人研究」の成果として、学年の生徒全員がワープロ入力による一定の書式に従ったレポートを提出する、という意識が定着したことが挙げられる。これは「課題研究」の要旨・レポート提出にも定着している。

コミュニケーション能力については、発表会そのものよりもむしろ、その準備段階における各係や発表者、そのサポーターたちの活動の方に目を向けたい。一つの発表会を企画して実施するまでの期間、研修係による準備と発表者との連絡調整は、必ずしも「仲間同士の活動」という性格のものではなかった。各クラスの研修係同士は、普段は話をしたこともない者同士であるし、発表者とそのサポートをする生徒も、決して仲の良いクラスメートばかりではなく、担任が仲介をして「コンピュータ利用技術を頼りにクラス内の得意な人をお願いした」、という者もいた。そのような決して親しい訳でもない生徒同士が、一つのイベント（目標）に向けて連絡を取り合い、意見を出し合いながら準備を進めていく姿は、文化祭などでも見られる風景ではあるが、それとはまた別の、どちらかといえばそのような活動にこれまで消極的だった生徒も巻き込んだ活動であったことが、一つの成果であったと思われる。

また、生徒の中には、「韓国に関する個人研究」と「課題研究」のテーマを継続して取り組む者も出た。独立記念館の見学がきっかけで、日韓相互理解をテーマに教科書問題の調査や高校生の日韓関係に関する意識調査などをおこなっているが、事前学習と校外学習が生徒に与えた影響力が多少なりとも表れた結果ではないだろうか。今後はこのような継続性を持った研究活動に取り組む生徒の数が増加することを期待したい。

以上、教師側からの振り返りを中心に述べてきたが、主役である生徒の意識が、これらの活動を通してどのように変化してきたか、その調査結果については次節に譲りたい。

6. 国際理解教育の成果

(1) 調査概要

日本・韓国の文化や人々に対して、生徒はどのようなイメージを持っており、事前学習と校外学習によってそのイメージがどのように変化するかを調査した。次の三種類の調査を行った。

①好き嫌い

②連想するもの

③イメージ

①は日本・韓国に対するイメージを「好き嫌い」に限

定して調査したもので、7段階の評定尺度法で測定した。②は「日本・日本人」「韓国・韓国人」から連想されるものを3つずつ挙げさせた。③は26の概念語からなるSD法を用いて調査した。本稿では①、②について考察する。③の分析結果は別の機会に行う予定である。①と②に関する調査用紙（図1）を次に示す。

調査用紙						
1. 日本・日本人についてどう思われますか。						
非常に	かなり	やや	もど	やや	かなり	非常に
		や	な	や		
		や	ら	や		
			い			
			で			
好き <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> 嫌い						
2. 韓国・韓国人についてどう思われますか。						
非常に	かなり	やや	もど	やや	かなり	非常に
		や	な	や		
		や	ら	や		
			い			
			で			
好き <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> 嫌い						
3. 日本・日本人という連想されるものを3つあげてください。						
①		②		③		
4. 韓国・韓国人という連想されるものを3つあげてください。						
①		②		③		

図1 調査用紙

調査は、事前学習が本格的に始まる前（平成12年5月）と、校外学習終了後（平成13年4月）に、校外学習に参加した生徒全員を対象に実施した。

(2) 調査結果

①好き嫌い

日本・韓国の「好き嫌い」を測定するために、7段階の評定尺度法を用いたが、およその傾向を見るために「非常に好き」「かなり好き」「やや好き」を一緒にして「好き」にまとめた。同様に「非常に嫌い」「かなり嫌い」「やや嫌い」を一緒にして「嫌いに」まとめた。この結果を表1に示す。数値の単位は％である。

「日本・日本人についてどう思うか」の設問では、男子・女子共に「好き」の割合が増えた。特に女子ではその増加が著しい。全体では8％の増加であった。

「韓国・韓国人についてどう思うか」の設問では、男子では「好き」に変化がなく、「嫌い」が9％増加した。また、女子は男子と違った傾向が見られ、「好き」が21％増加し、「嫌い」が7％増加した。全体では「好き」が14％増加し、「嫌い」が8％増加した。

表1 好き嫌い変容

		男 子		女 子		全 体	
		日本	韓国	日本	韓国	日本	韓国
事前調査	好き	49	22	42	13	45	16
	嫌い	11	11	13	14	12	13
	どちらでもない	40	67	45	73	43	71
事後調査	好き	55	22	52	34	53	30
	嫌い	10	20	11	21	11	21
	どちらでもない	35	58	37	45	36	49

(数値の単位は%)

日本・日本人をどう思うか(全体)

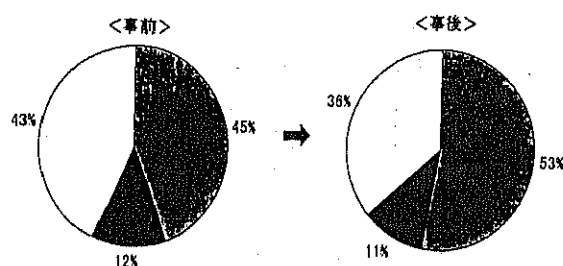


図2 「日本・日本人」「韓国・韓国人」好き嫌い変容

7段階評定尺度法を採ったので、好き嫌いの程度の高い部分ではどのような傾向が見られるかを調べた。

「非常に好き」「かなり好き」を一緒にして「好き好き」にした。また「非常に嫌い」「かなり嫌い」を一緒にして「嫌い嫌い」にして表に示した。(表2)数値は人数である。この分析では扱う人数が少ないので男女別の集計は行わなかった。

好き嫌いの程度の高い領域でも、前の「好き」「嫌い」「どちらでもない」の分析とまったく同じ結果が出た。「日本・日本人」が「好き好き」が、事前36人が事後43人に増加し、事前5人が事後2人に減少した。「韓国・韓国人」が「好き好き」が、事前5人が事後10人に増加し、「韓国・韓国人」が「嫌い嫌い」が、事前5人が事後7人に増加した。

表2 好き嫌い変容

		全 体	
		日本	韓国
事前調査	好き好き	36	5
	嫌い嫌い	5	5
事後調査	好き好き	43	10
	嫌い嫌い	2	7

(数値は人数)

②連想するもの

「日本・日本人」「韓国・韓国人」で連想するものを各3つ挙げさせた。日本・韓国に対するイメージが制約を外した場合にどのようなものが挙がるかを知るためのものである。また、そのイメージの広がり・多様性がどのように変化するかを調べた。

生徒の回答を次の3視点から分析した。ただし、データは学年全体のものではなく、クラス毎に集計した。

(表3) 合計数は各クラスのを単純に足し合わせた。

①連想した語彙の種類

②10人以上が連想した語彙数

③重複しない語彙数

①は連想の広がりを見るために設けた。結果は「日本・日本人」では事前224種が事後218種、「韓国・韓国人」では事前141種が事後145種と、どちらも大きな変化は見られなかった。連想の広がりという意味では、③の重複しない語彙数でも見る事ができる。「韓国・韓国人」の連想で92種から99種とわずかに増加した。「日本・日本人」の連想はほとんど変化がなかった。

②の分析では、「日本・日本人」「韓国・韓国人」の連想に事前事後で変化が見られた。「日本・日本人」の連想では、事前調査で10人以上が連想した語彙はなかったが、事後調査では3種類存在した。A組の「着物(13人)」とD組の「すし(11人)」「富士山(10人)」である。

一方、10人以上が連想した語彙数を「韓国・韓国人」の連想でみると、事前調査で合計数9が事後調査で6に減少した。事前調査でのその語彙は、A組が「キムチ(32人)」「焼肉(19人)」、B組が「キムチ(33人)」「焼肉(12人)」「ハンゲル(10人)」、C組「キムチ(37人)」「焼肉(11人)」、D組が「キムチ(34人)」「焼肉(18人)」であった。どのクラスも生徒の連想が「キムチ」と「焼肉」に集中した。

事後調査での6つの語彙は、A組が「キムチ(30人)」「焼肉(14人)」「ハンゲル(10人)」、C組が「キ

ムチ (30人)」、D組「キムチ (32人)」「焼肉 (16人)」である。クラスによっては集中した語彙数が増加したが、10人以上重複した語彙がなかったクラス (B組) が出るなど、学年全体で見ると連想の集中化は事前調査ほど激しくなくなった。

表 3 連想変容

		日本・日本人					韓国・韓国人				
		A	B	C	D	計	A	B	C	D	計
事前調査	種類	56	53	59	56	224	38	33	40	30	141
	10人以上	0	0	0	0	0	2	3	2	2	9
	1人	34	35	35	42	146	28	23	24	17	92
事後調査	種類	52	63	57	46	218	35	33	38	39	145
	10人以上	1	0	0	2	3	3	0	1	2	6
	1人	39	41	39	28	147	27	18	25	29	99

(3) 考察

生徒全員に行った2種類のイメージ調査 (SD法による調査は本稿には含まれない) によって明らかになったことを調査種ごとにまとめると次のようになる。(表4)

表 4 調査結果要約

「好き嫌い」調査	
○「日本・日本人」に対する好き嫌い	<ul style="list-style-type: none"> ・「好き」の割合が増加 ・「嫌い」の割合がわずかに減少 ・「どちらでもない」の割合が減少
○「韓国・韓国人」に対する好き嫌い	<ul style="list-style-type: none"> ・「好き」の割合が大幅に増加 ・「嫌い」の割合が増加 ・「どちらでもない」の割合が減少
「連想」調査	
○連想語彙の種類	<ul style="list-style-type: none"> ・「日本・日本人」の連想の方が「韓国・韓国人」の連想より語彙の種類は多く、約1.5倍である。 ・「日本・日本人」「韓国・韓国人」の連想は、語彙の種類ではどちらも事前調査・事後調査で変化がない。
○10人以上が挙げた語彙数	<ul style="list-style-type: none"> ・「日本・日本人」の連想では事後調査で、連想に収束傾向が見られる。 ・「韓国・韓国人」の連想では事後調査で、連想に拡散傾向が見られる。
○重複しない語彙数	<ul style="list-style-type: none"> ・「日本・日本人」「韓国・韓国人」の連想は、重複しない語彙数では、語彙の種類と同様、どちらも事前調査・事後調査で変化がない。

「好き嫌い」調査では、日本・韓国両方の事前調査でも「どちらでもない」の割合が高く、事後調査でその割合が減少している。韓国の数字の減少は、韓国に関する情報が事前学習・校外学習を通じてもたらされ、韓国の理解が進んだ影響である。一方、日本の「どちらでもない」の割合の減少は、日本人としてのアイデンティティ確立が進んだ数字と見ることができる。事前調査の段階では、日本・日本人と韓国・韓国人の境界が不明確で、生まれ育った日本に評価が下せずにいた。その後、事前学習・校外学習で日本と韓国の比較などを行い、日本・日本人に対する自分なりの評価が行えるようになったといえる。日本人である自分を客観的に見るできるようになったという点で、アイデンティティ確立が一步進んだと見ることができる。

「連想」調査では、生徒の韓国・韓国人に対するイメージがどの程度広がるかを分析の視点として持っていたが、結果は「語彙の種類」「重複しない語彙数」の変化からはイメージは広がっていないことが明らかになった。しかし、「10人以上が挙げた語彙数」からは興味深い結果が得られた。事後調査で、「日本・日本人」の連想に収束傾向が見られ、「韓国・韓国人」の連想に拡散傾向が見られた。これは日本らしさ、日本人らしさが明確になったためと思われる。また、韓国に対する拡散傾向は、異文化理解が進み「韓国・韓国人」を多元的に見ることができるようになったからであろう。

第15期中教審の第一次答申では「国際化と教育」に一章を設け、「国際化が急速に進展する中で、絶えず国際社会に生きているという広い視野を持つとともに、国を越えて相互に理解し合うこと」の必要性を強調している。同時に国際理解教育を進めるに当たっての留意点を三点あげている。

- ・異文化理解
- ・自己の確立
- ・コミュニケーション能力育成

本校で行った校外学習 (事前学習・事後学習を含む) の成果がどの領域で発揮されたか。これを中教審答申の配慮すべき留意点との比較すると、「異文化理解」「自己の確立」の二点で、教育効果があがっていることがわかる。「コミュニケーション能力育成」については、明らかにすることはできなかった。しかし、コミュニケーション能力育成も本校の校外学習のねらいの一つであり、様々な活動を組み入れてきたので、この能力も育成されているはずである。今回のイメージ調査という方法では、対象外の能力であった。今後の課題としたい。

7. 課題と今後の展望（まとめ）

これまでに紹介した様々な学習活動は、それぞれの担当者が知恵を絞りながら発展し、総合学科2年次の学習にふさわしいものであるという認識を持つに至ったことに異論は無いであろう。隔週の週5日制を柔軟に使い且つ開かれた授業が展開されてきた。今後は、『産業社会と人間』『産業理解』の流れを考慮しつつ、年次を中心に総合的学習の時間～異文化理解・国際交流～の内容としてふさわしい授業計画の作成を全校的に行うことが求められる。現在教育課程検討委員会：総合的学習の時間小委員会で鋭意作成中で、平成14年度2年次より移行の予定である。



写真：民族村で民族舞踊の踊り手さんとの交流